

# 新保南遺跡

中山間地域総合整備事業に伴う  
試掘調査概要

2001年3月

氷見市教育委員会

# 新保南遺跡

中山間地域総合整備事業に伴う  
試掘調査概要

2001年3月

水見市教育委員会

# 目 次

第1章：調査に至る経緯と経過 .....	1
第2章：遺跡の環境 .....	2
第1節：遺跡の地理的環境 .....	2
第2節：遺跡の歴史的環境 .....	2
第3章：調査の成果 .....	4
第1節：調査の概要 .....	4
第2節：遺物 .....	4
第4章：まとめ .....	6
参考文献 .....	7
報告書抄録 .....	8

## 図目次

第1図 新保横穴群と周辺の様子 .....	1	図 版
第2図 周辺の遺跡 .....	3	1 (1) 遺跡遠景（西から）
第3図 調査地区と遺跡の範囲 .....	5	1 (2) 遺跡近景（北から）
第4図 遺物実測図 .....	5	2 遺跡周辺空中写真
第5図 小窪廐寺塔心礎と小窪瓦窯跡窯体 .....	6	3 遺構の様子（1）
第6図 小窪廐寺採集遺物 .....	7	3 遺構の様子（2）
		4 調査風景
		4 (1) 遺物（外面）
		4 (2) 遺物（内面）

## 例 言

- 1 本書は、富山県氷見市新保地内に所在する新保南遺跡の試掘調査報告書である。
- 2 調査は、中山間地域総合整備事業による圃場整備工事に先立ち、富山県農地林務部高岡農地林務事務所の依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査費用については、国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。
- 4 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置き、文化係長坂本研資・主任小谷超が調査事務を担当し、課長石崎久男が統括した。
- 5 調査は、氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員大野究が担当した。
- 6 本書の編集・執筆は大野が担当した。
- 7 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市立博物館が保管している。
- 8 調査参加者は次のとおりである。  
発掘作業：沢井正雄・瀬戸清・沢井とき・中村かず子・坂田かずい・向春子（以上、氷見市シルバーメンタルセンター）  
整理作業：三矢恵京・嵩尾朋昭・日南静
- 9 調査にあたっては、以下の方々のご協力をいただいた。記して謝意を表します。  
富山県高岡農地林務事務所・氷見市農地林務課・新保地区

## 第1章 調査に至る経緯と経過

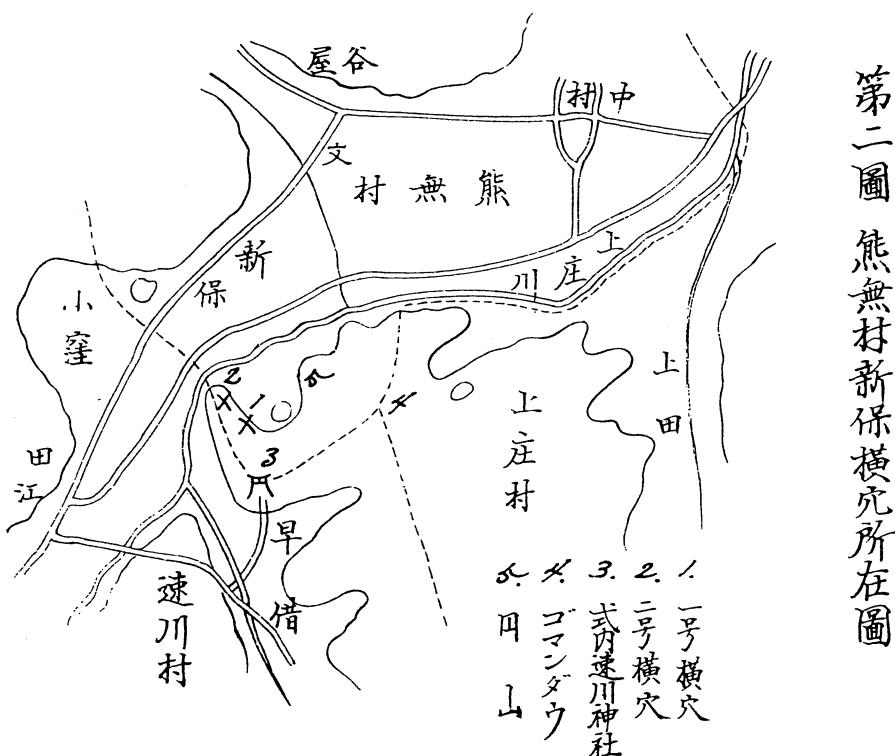
平成10年10月、氷見市農地林務課から新保地区において中山間地域総合整備事業による圃場整備の計画があることが知らされ、計画地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。

事業計画予定地内には、埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったが、周囲の丘陵に古墳や横穴が、数多く分布していることから、氷見市教育委員会では事業地内における埋蔵文化財の状況を把握するため、平成10年11月に分布調査を実施した。

分布調査の結果、事業予定地のかなり広い範囲で、遺物が表面採集されたため、この範囲を新保南遺跡として周知するとともに、包蔵地のより詳しい状況を把握するための、試掘調査を実施することにした。

試掘調査は平成13年3月6日から16日まで、機械力と人力によって実施した。調査対象面積は30000m<sup>2</sup>、調査面積は148m<sup>2</sup>である。

調査対象地の水田は、西南から東北に向けて段々に下がっており、比較的遺物採集量の多い西南側の高位水田から試掘坑を設定し、発掘調査を実施した。遺跡の範囲を設定する上で手がかりとしたのは、遺構のある黄褐色砂質土層の有無である。調査の結果、対象地区中央南側の水田では、遺物が希薄となり、遺構面も確認されないため、対象地東北側には遺跡は広がらないと判断した。



第二圖 熊無村新保横穴所在圖

第1図 新保横穴群と周辺の様子 ([林 1930] から)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230m<sup>2</sup>、人口は約5万6千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、東側は富山湾に面している。

遺跡の所在する新保地区は、氷見市のほぼ中央を流れる上庄川中流に位置する。上庄川は、氷見市南西端の大釜山（501.7m）に発し、約22kmで富山湾に注ぐ河川であり、氷見市では長さ・流域面積が最大のものである。

水源からほぼ北上して流れる上庄川は、ちょうど新保地区のあたりで東に屈折しており、またここは南下してきた論田川との合流地点に近い。論田川はその上流に、地滑り地帯である論田・熊無地区を抱えており、これまでに多量の土砂を排出したとみられ、新保・谷屋・中村地区の上庄川が、谷の南側を流れるのは、論田川からの土砂に押しやられたからではないかと考えられている。

新保南遺跡は、この上庄川の屈折地点右岸の谷に立地し、標高は約13mである。この谷は、東西約500m、南北約300m、北が上庄川、他の三方が丘陵に取り囲まれ、その南には「堂の池」と呼ばれるため池がある。

### 第2節 遺跡の歴史的環境

以下では、上庄川中流域の遺跡を大まかに示しながら、歴史的環境を述べたい。

本遺跡周辺の地域では、弥生時代以前の遺跡は今のところ確認されていない。

古墳時代のこの地域は、氷見市内で最も古墳が集中する地域であり、本遺跡の南側の丘陵に速川神社古墳群、東側の丘陵にイヨダノヤマ古墳群が立地し、西側の丘陵には、本遺跡に向かう形で新保横穴群が所在する。上庄川をはさんだ北側の丘陵には、中村天場山古墳・中村粟屋古墳群、谷屋浦出古墳群・新保古墳群・中村横穴群などが立地する。このうち直径約20mの円墳であるイヨダノヤマ3号墳は、平成5年に発掘調査が実施され、埋葬施設から県内3例目となる短甲のほか、鉄刀・鉄鏃などが出土し、古墳時代中期の武人的性格の被葬者が推定されている。また、谷屋B遺跡では、子持勾玉が採集されている。

古代には、上庄川をはさんで本遺跡の西約500mに小窪廃寺が所在し、これまでに平瓦や須恵器が採集されており、8世紀初め頃の寺院と推定されている。また現在小久米神社境内にある「いぼ石」は、小窪廃寺から出土した同廃寺の塔心礎石とされ、さらに廃寺の南方約250mには、その瓦の一部を焼いた小窪瓦窯が立地している。

中世には、新保城跡・新保西城跡が築かれており、速川神社南側の一帯は、滝尾山とよばれ、宗教関連遺跡の立地が推定されている。



第2図 周辺の遺跡（1／25000）

- |                     |                 |                  |
|---------------------|-----------------|------------------|
| 1 新保南遺跡（古代・中世）      | 19 飛滝城跡（中世）     | 37 泉谷内口古墳群（古墳）   |
| 2 新保横穴群（古墳）         | 20 谷屋新堂出古墳（古墳）  | 38 泉A遺跡（古代）      |
| 3 速川神社古墳群（古墳）       | 21 谷屋A遺跡（古代・中世） | 39 泉C遺跡（古代）      |
| 4 イヨダノヤマ古墳群（古墳）     | 22 新保城跡（中世）     | 40 中尾喜城古墳群（古墳）   |
| 5 滝尾山遺跡（中世）         | 23 新保古墳群（古墳）    | 41 泉B遺跡（古代・中世）   |
| 6 早借サカタ遺跡（中世か）      | 24 新保西城跡（中世）    | 42 上田古墳群（古墳）     |
| 7 小窪寺跡（古代）          | 25 谷屋浦出古墳群（古墳）  | 43 千久里城跡（中世）     |
| 8 小窪瓦窯跡（古代）         | 26 谷屋B遺跡（古墳）    | 44 上田A遺跡（古代）     |
| 9 小窪城跡（中世）          | 27 谷屋C遺跡（古代）    | 45 上田B遺跡（中世）     |
| 10 田江北古墳群（古墳）       | 28 中村天場山古墳（古墳）  | 46 竹里岩屋堂遺跡（中世）   |
| 11 田江大畠遺跡（縄文）       | 29 中村粟屋古墳群（古墳）  | 47 中尾茅戸古墳群（古墳）   |
| 12 田江古墳群（古墳）        | 30 中村城跡（中世）     | 48 上田C遺跡（詳細不明）   |
| 13 小久米B古墳群（古墳）      | 31 中村横穴群（古墳）    | 49 上田D遺跡（古墳）     |
| 14 白詰コブクロ遺跡（古代）     | 32 柿谷大口遺跡（中世）   | 50 上田南儀遺跡（縄文・古代） |
| 15 早借ヤワタ古墳群（古墳）     | 33 柿谷土谷山古墳群（古墳） | 51 上田F遺跡（古代）     |
| 16 久目トリノマエ遺跡（古代・中世） | 34 泉横山遺跡（古代）    | 52 上田E遺跡（詳細不明）   |
| 17 久目安楽寺遺跡（古代）      | 35 泉古墳群（古墳）     | 53 高松城跡（中世）      |
| 17 久目桑の木遺跡（古代）      | 36 泉往易古墳群（古墳）   |                  |

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

分布調査では、谷の西側を中心に広い範囲で遺物の散布がみられた。ただ、この谷は過去にも圃場整備が行われていること、現在も水田耕作が行われていることから、散布の範囲と遺跡の範囲が一致する可能性は低いものと考えた。そこで散布の多い西側を中心に試掘坑を設定し、主として遺構面有無の確認を目的として、試掘調査を実施した。

その結果第 図の範囲で水田耕作面の直下、表面から20~30cmのところで、黄褐色砂質土の遺構面を確認した。確認した遺構は、穴・溝である。

### 第2節 遺物

遺物については、分布調査で採集したもの、試掘調査で出土したものをあわせて報告するが、古代・中世・近世のものがある。

古代では、須恵器杯A蓋0.51個体・杯B蓋0.39個体・杯Aと杯B0.25個体・瓶類（横瓶・小型壺含む）0.16体・甕0.02個体、土師器杯・鍋・甕、中世では、土師器皿0.06個体、珠洲鉢・壺・甕0.02個体、近世では、陶磁器類0.33個体である。

このうち7点を第4図に図示した。

1は、古代須恵器杯A蓋である。口径14.7cmであり、内面のかえりは口縁端部とほぼ同一である。胎土に白砂粒を若干含み、焼成は不良で、生焼けに近い。色調は灰色を呈す。7世紀末頃のものであろう。

2は、古代須恵器杯A蓋である。口径14.4cmであり、内面のかえりは短い。胎土に白砂粒を若干含み、焼成は良好で、青灰色を呈する。頂部は時計回りの回転鎌削りを施す。7世紀末頃のものであろう。

3は、古代須恵器杯B蓋である。口径16.0cmであり、口縁端部は強く屈曲する。胎土に白砂粒を若干含み、焼成は良好で、青灰色を呈する。9世紀中頃のものであろう。

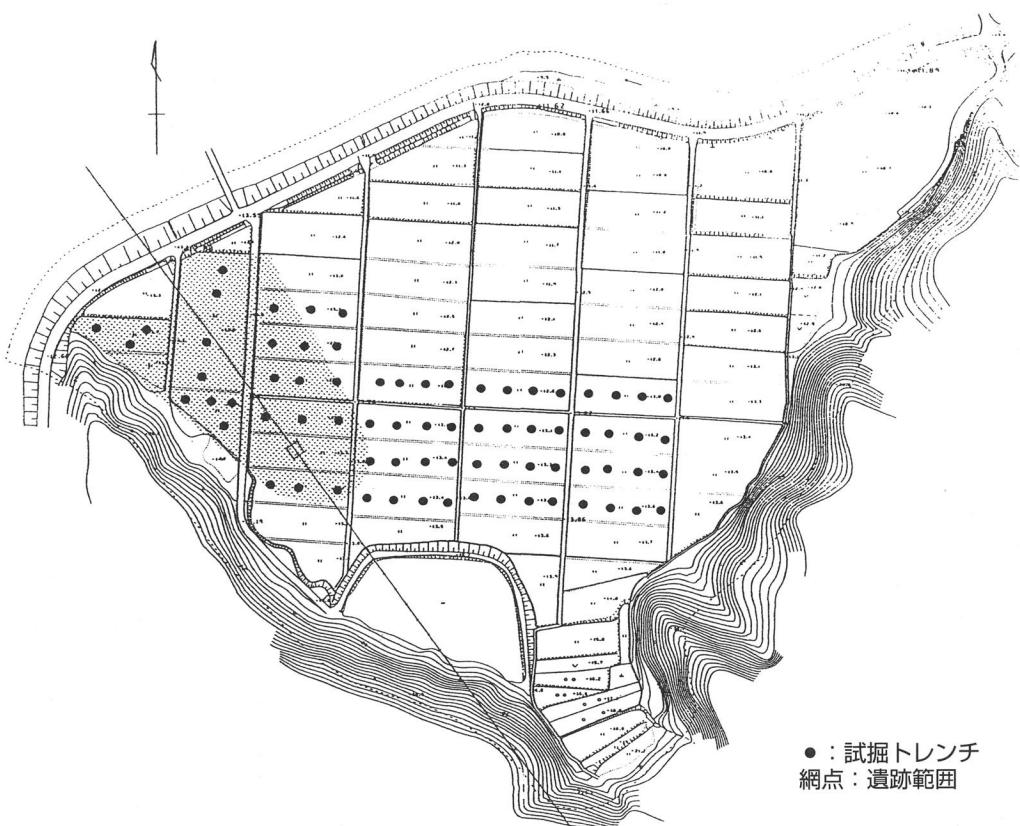
4は、古代須恵器瓶の脚部か。底径17.3cmであり、外面に自然釉がかかる。胎土に白砂粒を若干含み、焼成は良好で、青灰色を呈する。

5は、古代須恵器広口瓶の口縁部である。口縁端部をほぼ水平に引き出す。胎土に白砂粒を若干含み、焼成は良好で、青灰色を呈する。

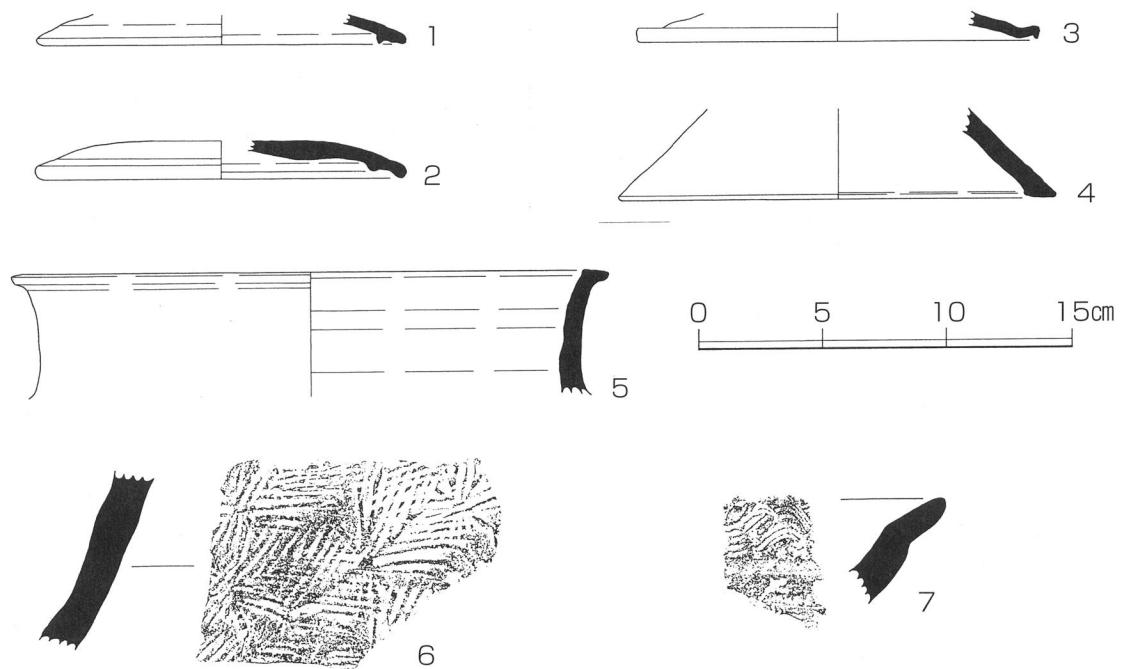
6は、中世珠洲壺の胴部破片である。菊花状の装飾叩打文を施し、装飾的な要素をもつ。胎土に白砂粒を若干含み、焼成は良好であるが、一部に焼き膨れがみられる。色調は暗灰色であるが、内面に自然釉が付着する。珠洲II期、13世紀前半のものであろう。

7は、中世珠洲鉢の口縁部破片である。口径は復原できないが、外反する口縁内側に5条の波状文を施す。胎土に白砂粒を含み、焼成はやや甘く堅緻さを欠く。色調は青灰色である。珠洲VI期、15世紀後半のものであろう。

図示できなかったものも含めて、古代・中世における本遺跡の時期を推定すると、7世紀末から9世紀中頃、13世紀前半~15世紀後半頃のものがあり、なかでも主体は7世紀末頃と推定される。



第3図 調査地区と遺跡の範囲 ( $S = 1/4000$ )



第4図 遺物実測図

## 第4章 まとめ

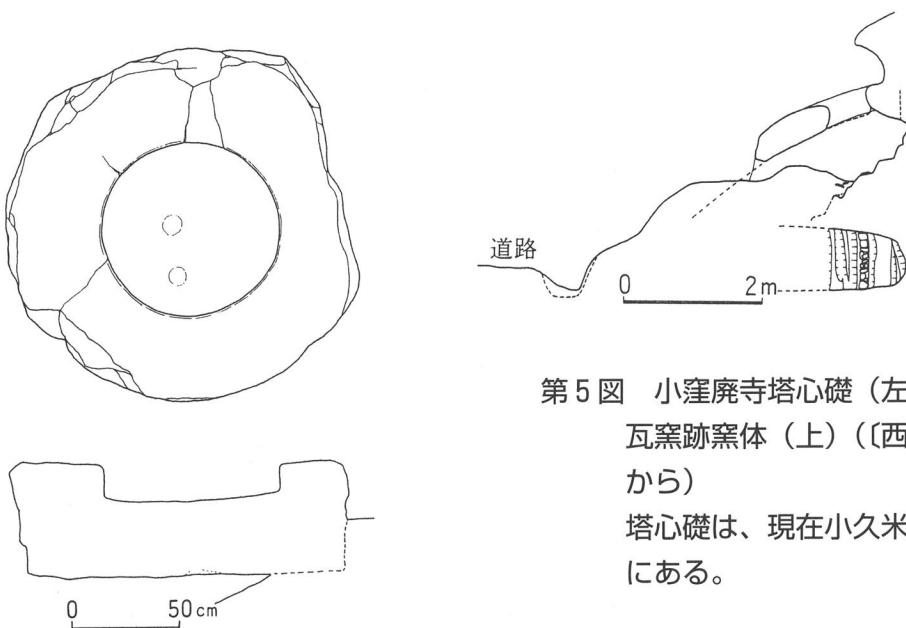
分布調査と試掘調査による成果からでは不十分な点が多いが、出土遺物を元に、現時点では推定される本遺跡の性格について若干のまとめをしておきたい。

本遺跡は、古代から中世にかけて断続的に営まれた遺跡であることが推定でき、特に7世紀末頃がその主体となる可能性が高いものと考えられる。

さて、第2章第2節で示したように、本遺跡の所在する上庄川中流地域は、氷見市で最も古墳の密集する地域であり、時期的にも前期古墳と推定される中村天場山古墳をはじめ、中期・後期と継続して古墳・横穴が築造されており、古墳時代を通して安定した基盤を維持していたとみられる。さらに8世紀初め頃には、上庄川をはさんで本遺跡の西約500mに小窪廃寺が造営され、その建物に使用するための瓦を焼く窯として小窪瓦窯も築かれている。こうした背景には、この地域が比較的まとまった平野を擁すること、さらには上庄川の水運や陸路によって、能登との交通ルートとして重要な立地を占めていたことなどがあげられよう。

小窪廃寺を造営した勢力としては、万葉集卷十九に、天平勝宝3年（751）の射水郡大領として安努君広嶋の名があり、安努一族の氏寺として造営された可能性が高い。しかしながら、上庄川中流地域について古墳時代・古代の集落の様相は不明な点が多く、その本貫地については確定ができない。

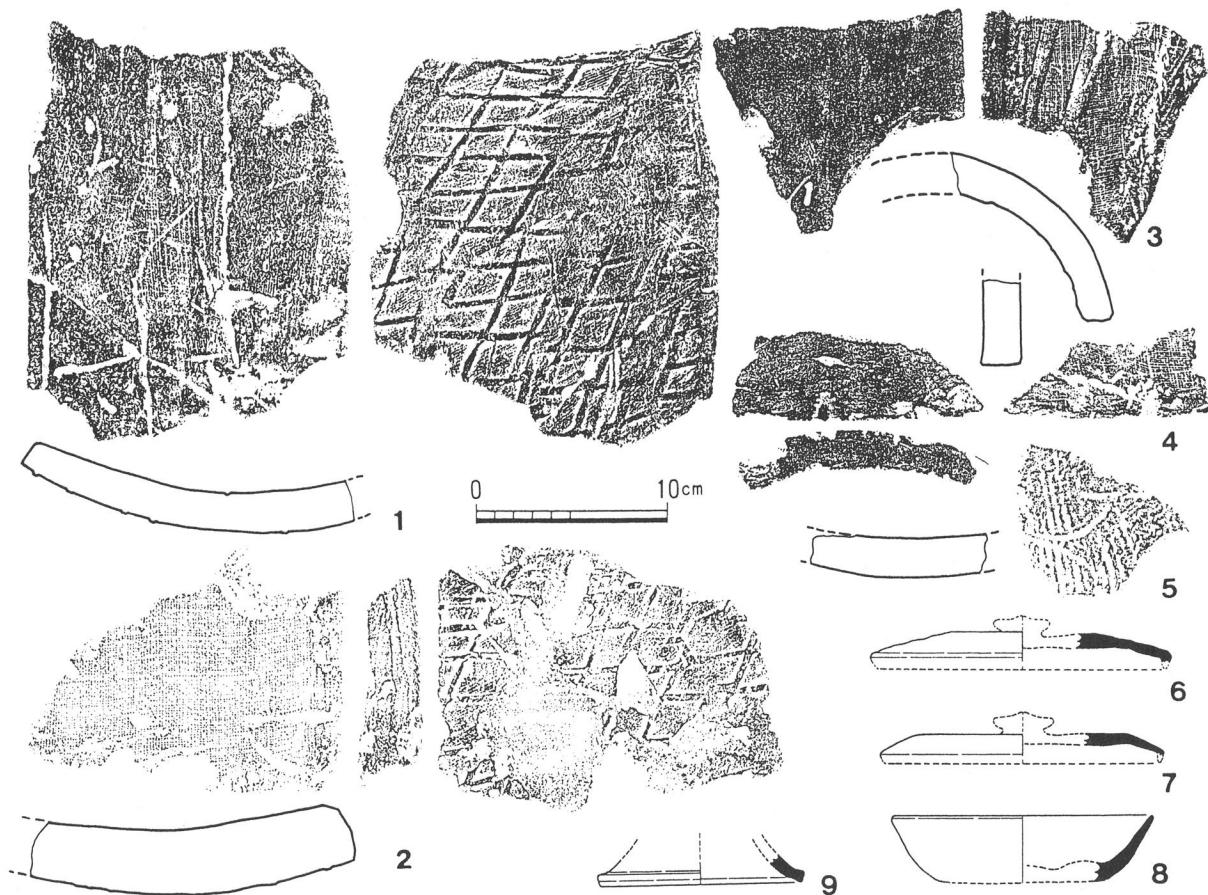
本遺跡については、すぐ西側の丘陵斜面に新保横穴群が立地しており、両者が密接な関係にあったことは推定できるが、小窪廃寺造営の時点では、一旦廃絶、もしくは衰退していたと考えられる。上庄川中流域の集落遺跡の動向には、第2章第1節で示したように、自然的・地理的条件も大きく作用していたものと考えられるが、古墳時代から律令国家へと転換していく地域の歩みを知る上で、本遺跡は重要な位置にあるものと考えられる。



第5図 小窪廃寺塔心礎（左）と小窪瓦窯跡窯体（上）（〔西井1987〕から）  
塔心礎は、現在小久米神社境内にある。

## 参考文献

- 大野 究 1993 「朝日潟山古墳群・中村天場山古墳測量調査の成果」『氷見市遺跡地図〔第2版〕』氷見市教育委員会
- 大野 究 1998 「イヨダノヤマ3号墳」『氷見市立博物館年報』第16号
- 西井龍儀 1971 「氷見市谷屋発見の子持勾玉」『考古学ジャーナル』No54
- 西井龍儀 1987 「小窪廃寺」「小窪瓦窯跡」『北陸の古代寺院』桂書房
- 速川村史編集委員会 1987 『速川村史』
- 林喜太郎 1930 「熊無村横穴古墳」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第10号
- 氷見市 1998 『氷見市史』3 資料編1 古代・中世・近世1
- 氷見市 1999 『氷見市史』9 資料編7 自然環境



第6図 小窪廃寺表採遺物（〔西井1987〕から）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しんばみなみいせき							
書名	新保南遺跡							
副書名	中山間地域総合整備事業に伴う試掘調査概要							
卷次								
シリーズ号	氷見市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第34冊							
編著者名	大野 究							
編集機関	氷見市教育委員会							
所在地	〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号 TEL 0766 (74) 8215							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯 °・'・"	東経 °・'・"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しん ほ みなみ 新 保 南 遺 跡	と やまけん ひ み し 富山県氷見市 新 保	16205	301	36° 51' 10"	136° 55' 05"	20010306 20010316	148	圃場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新保南遺跡	散布地	古代 中世	溝など		須恵器 土師器 珠洲			

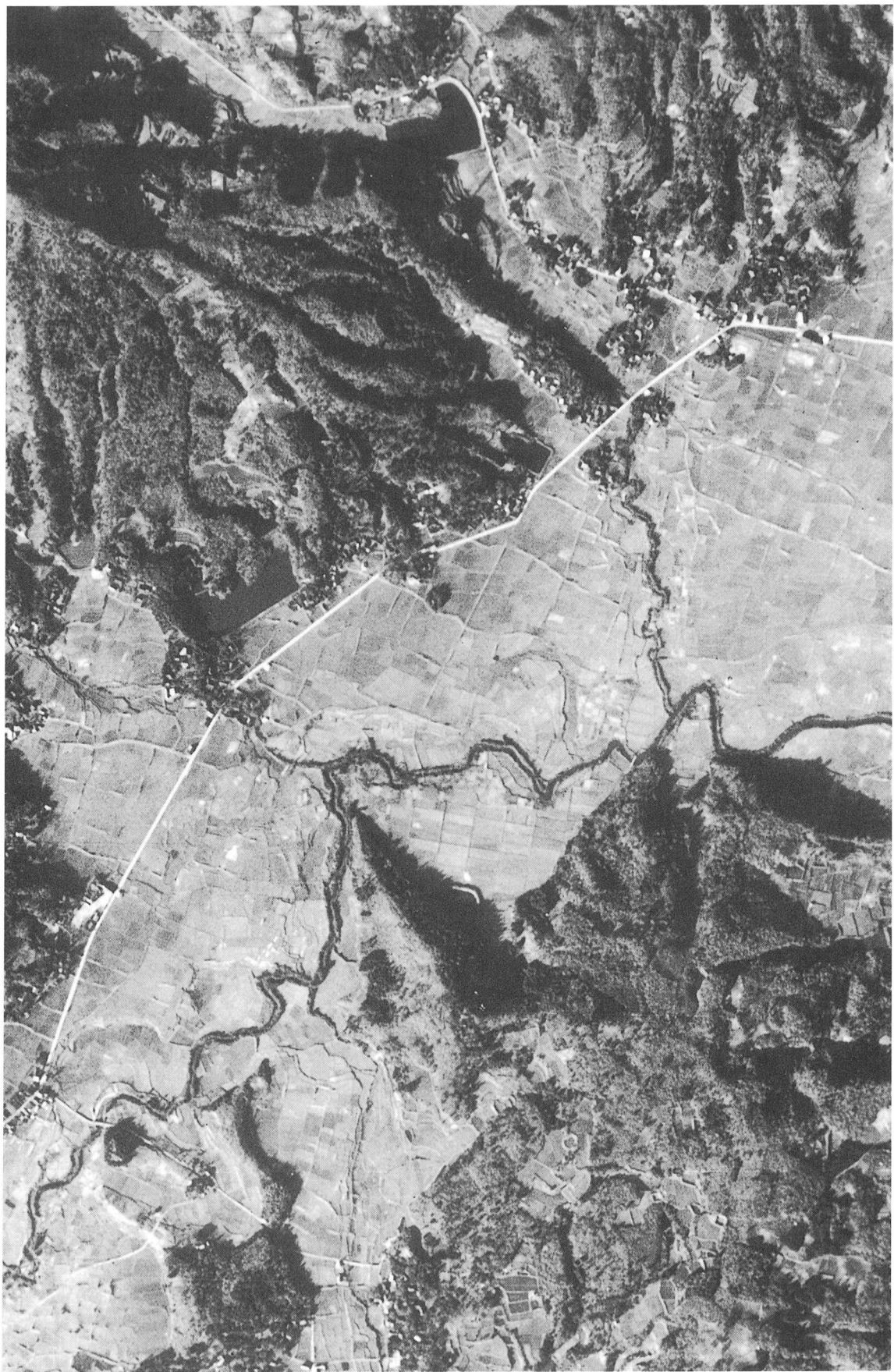
図版



(1) 遺跡遠景（西から）



(2) 遺跡近景（北から）



遺跡周辺空中写真（1947年撮影）



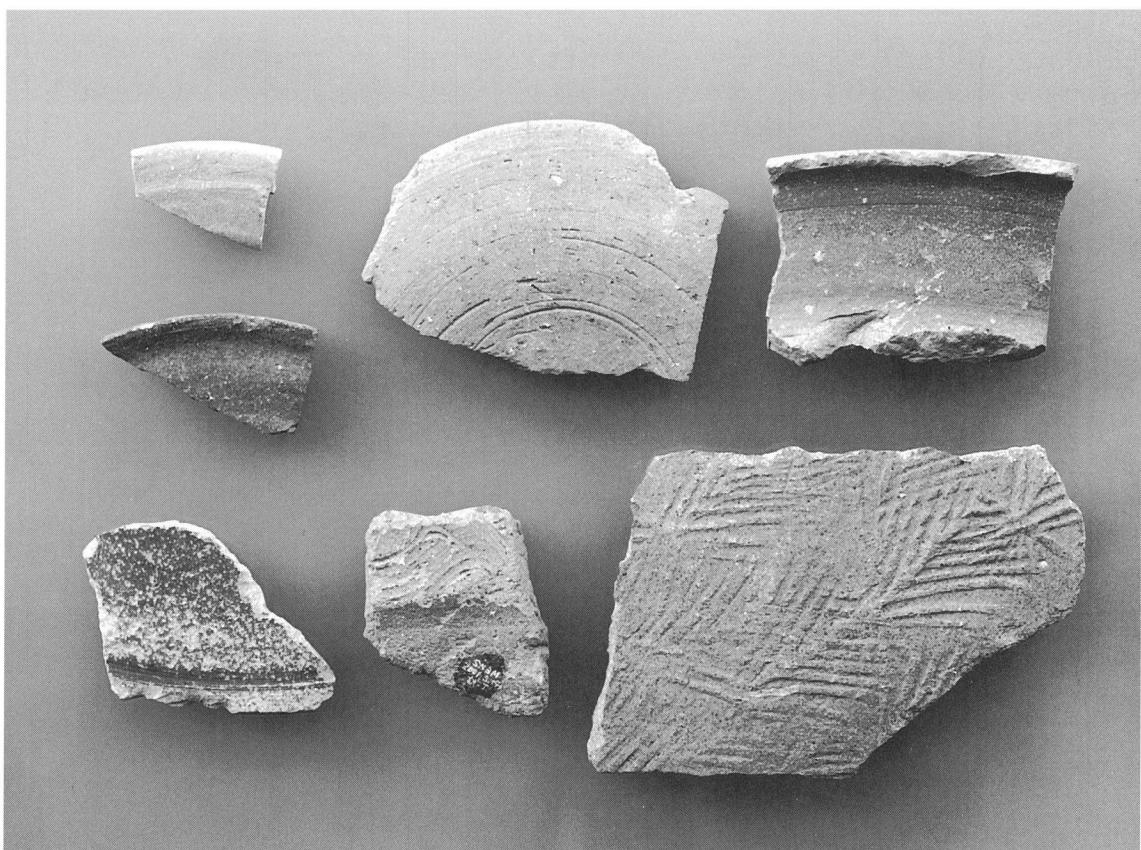
遺構の様子(1)



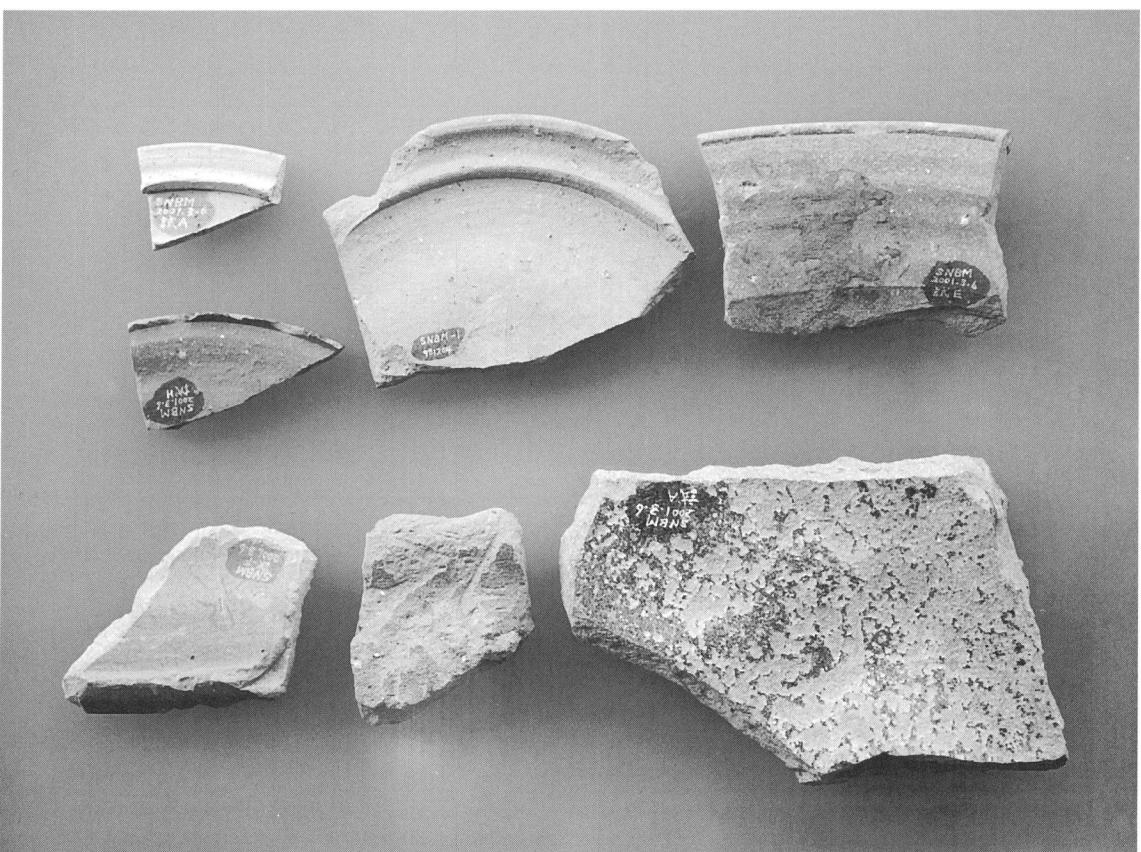
遺構の様子(2)



調査風景



(1) 遺物（外面）



(2) 遺物（内面）

平成13年3月25日 印刷

平成13年3月31日 発行

## 新 保 南 遺 跡

氷見市埋蔵文化財調査報告第34冊

編集・発行 氷見市教育委員会

〒935-0016

富山県氷見市本町4番9号

0766(74)8215

印 刷 北日本印刷(株)